

国

語

【注 意】

- 【一】開始の合図があるまで開けないこと。
- 【二】問題は 1 ページから 21 ページまでに印刷してあります。開けたらすぐにページを確かめること。
- 【三】答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 【四】字数制限のある問題は、句読点も一字分として数えます。
- 【五】試験終了後は、まず解答用紙を回収し、そのあと問題用紙も回収しますが、問題用紙には名前を書く必要はありません。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合により本文の一部を改変しています)

私はさまざまな国に講演に招かれたりして、若い人たちと話し合う機会がある。そこで自ずから比較することになるが、日本の学生や十代の若い人たちは、諸外国の同年代の人たちに較べて、一般にかなり幼く感じることが多い。表情や態度もそうだが、たとえば質問である。話していて、「何か質問はありませんか?」と言おうものなら、アメリカ人とかフランス人とかの学生たちは、ここを先途と質問だけでなく自分の意見を言いはじめめる。アジアでも韓国の学生など、積極的にハキハキと質問する。日本だと大人はちゃんと喋るが学生や十代の青年たちに重い口を開かせるのは苦勞する。

とはいえ私だって、大人ときちんと話し合うことが大の苦手の少年時代を過ぎてきたことはこれまでに書いてきたとおりだから、大きな口は利けない。われわれの社会では、大人から言われることを「ハイ、ハイ」と聞いていれば素直な子だと言われ、主張を通そうとすると「文句が多い」とかいつて嫌われる。だから大人と話す訓練ができておらず、あらたまつてさあ自分の意見を言ってみろ、などと言われると、「意見なんてないよ」とまことついて往生してしまふ。

しかし、人間、情理かねそなわつた自分の意見を言えなければ大人じゃない。

で、□ A、大人になるということはどういうことか。

まず、あいさつやお礼の言葉などを、必要なときに必要なだけ、きちんと言えろこと。

こんなことを第一にあげると、それら、大人に従順な良い子がいいと言いたいんだろう、魂胆分つた、と言われそう。私が言いたいことはむしろ逆だ。大人にきちんと言えろようになろう、ということだ。人間、赤ん坊のうちには自分で何も言わなくても、自分がやつてほしいことはなんでも親が察してやつてくれる。親は自分の心を隅々まで分つてくれているみたい。少し察しが悪いと思つたら泣けばいい。そうすれば親は一生けんめい考えて自分のやつてほしいことを

察しあててくれる。これを親と子の未分化状態と言ひ、子どもにとつて至福の時期とも考えられる。ほんとに至福かな? じつは恐怖の時期なんだけれど、誰もそのことを憶えていないだけかもしれない。

まあいい。しかしとにかく少しづつ大きくなるにつれて、子どもの要求は複雑になつてくるから察するのも難しくなるし、親もそうそう子どもにばかりかまつてもいられなくなる。泣いてばかりいないで、やつてほしいことを言葉で説明しなさいと言われる。説明できないこともないけれど、友達にいじめられたとか学校の成績が下つたとか、言えば恥ずかしいこともあつて、相変らず泣いて察してもらおうとすると、「いつまでも泣虫でしょうがない」と言われる。でもそう言ってもらえるのは幸せなんだ。私は小学校の四年生ぐらいまでは習慣のようになにかと泣いていた。

□ B、小学校の上級ともなればさすがにそうそうは泣けなくなる。親にしる教師にしる、大人にやつてほしいことがあれば言葉できちんと説明しなければならなくなるが、説明しなくても察してもらえた小さいときの習性が続いていて、こんなこと説明しなくなつて察してくれているはずなのに分つてくれないとか、いちど言ったのになぜまた聞くんだとか、分つてもらえないことの不満が増えることになる。子どもの側の説明する能力も少しは進歩してゆくが、親が子どもだった時代と今では世の中が変りすぎて、少しぐらい進歩した子どもの説明能力では追いつかないことが多いし、うまく言えないところは泣いて、とりあえず自分がいま本当に困つていてということだけでも察してもらおうという奥の手は封じられてしまつていて。さあ困つた。どうするか。どうも君たちはそこで、まず □ X ということになるようだな。

それが決して上手い手ではないということは君たちがいちばんよく知つてはいるはずだ。教師に対してもそうだろう。いやもともと教師には分つてほしいことなんか言つてみたこともなかったか?

こうして親や教師は君らが何を考へているか分らなくなり、心配してなにかと聞き出そうとするし文句を言つし干渉す

る。君らはそれにまともに答えていないことを棚³にあけて、そういう大人の言葉のマト外れのところにだけ苛^{いら}だつ。C

「うるせえなあー」と思う。ときには口に出して言う。
しかし残念ながら君らはまだ親の保護下にあるし教師の監督^{かんてく}下あるいは監視下にある。うるさいからといって、その声のどこかないところまで逃^にげてゆくわけにはゆかない。相談しなければならぬこと、頼^{たの}まなければならぬこと、さらには文句を言ったり抗議^{こうぎ}したりしなければならぬことがけつこうある。いずれ君たちは大人に、自分の言いたいことをきちんと言わなければならない。そのとき大事になるのが、敬語、ていねい語、そして筋道だった話し方だ。世間の大人たちは親たちのように君の気持を察してはくれないし、教師たちのように生徒の心を理解しようとする義務もない。だから分つてほしいことがあれば自分から話しかけて聞いてもらわねばならない。礼儀^{れいぎ}正しくていねいに話しかければ君の必要なこともやつてはもらえないのだ。D 礼儀はおぼえなければならぬ。べつにいい子になれってことではなくて、それが大人になるということのほんの第一歩なのだ。私は⁴その必要を、いろんな工場を転々として働いていた十代の半ば頃^{ころ}に痛感したが、二十歳^{さい}ぐらゐまで容易に身につかなくてまいったね。

あいさつや礼儀がきちんとできるようになったとき、たぶん君は、親⁵、教師、さらには広く社会に対する甘え^{あま}から脱却^{だつきやく}しようとする自覚を持つようになっているはずだ。まあ、口先やうわべの態度だけ立派で本心はぜんぜん違^{ちが}うという人間もいるし、大人たちの全く形だけのあいさつや、卑屈^{ひくつ}さや傲慢^{ごうまん}さがむき出しのあいさつなどを見ているとYして、あんな大人になんかたくなくないという気持にもなるだろうが、まず態度からきちんと整えると気持がそれについてくるということもあるのだ。だから形式をバカにしてはいけない。

大人にきちんとした態度をとり、礼儀正しく筋の通つた話し方をしようとするということは、相手から何かを察してもらおうと甘えたり、察してくれなきや口も利いてやらないぞとすねたりする子どもっぽいやり方をやめて、大人たちと一対一

の人間同士として向き合うということだ。説明して分つてもらえることと分つてもらえないこと、受け容^{ゆる}れてもらえられることともらえないこととの区別をきつちり受け止めて冷静に考えることができるようになれば、とりあえず、それで大人だ。親や教師に文句を言いたいことがあつたら、とりあえずは礼儀正しく言おう。少なくとも二度、三度、四度目ぐらゐまではいつそうていねいにね。キれるのはそれからいい。しかしたぶん、そうするとキレないと思うよ。

(一九九八年 佐藤 忠男『大人になるということ』岩波書店)

〔注〕 *先途…勝敗・運命などの大事な分かれ目。せとぎわ。

*往生…困り果てること。

*情理…人情と道理。

*魂胆…心の中にいだいているたくらみ。

*干渉…他人のことに立ち入り、無理に自分の意思に従わせようと指図^{さしず}や妨害^{ぼうがい}をすること。

*卑屈…いじけて自分をいやしめること。

*傲慢…人を見くだすようす。

問 一 A D にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | A | ちなみに | B | だが | C | 一方で | D | やはり |
| イ | A | とはいえ | B | それに | C | つまり | D | さらに |
| ウ | A | さて | B | しかし | C | そして | D | だから |
| エ | A | それでは | B | しかも | C | その上 | D | だけど |

問 二 傍線部1「日本だと大人はちゃんと喋るが学生や十代の青年たちに重い口を開かせるのには苦勞する」とありますが、筆者はその理由をどのように説明していますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の学校では、子どもが大人に対して意見を言う際、まず大人の意見に耳を傾けることが大切であると教育されるため、大人の意見を聞かずに、自分の意見を言える子どもが少ないから。
- イ 現代の社会環境はめまぐるしく変化しており、大人と子どもの物の見方や考え方に大きな隔りがあるため、コミュニケーションをとろうにも、互いに理解し合って対話することが難しいから。
- ウ 日本の子どもたちは、大人に嫌われてしまうことを極度に恐れ、大人としっかり向き合って話すことに苦手意識を持つており、言いたいことも十分に言えなくなってしまっているから。
- エ 日本では、大人の言うことをよく聞く子どもが評価され、逆に自己主張をする子どもは好まれないという風潮があるため、子どもが大人に対して意見を言う練習を十分にできないから。

問 三 傍線部2「自分がやってほしいことはなんでも親が察してやってくれる」について、次の問いに答えなさい。

- ① 幼児期におけるこのような親と子のありようを何と言いますか。文中から十一字で抜き出さないさい。
- ② 幼児期に、子どもの気持ちを「親が察して」あげようとするのは、この時期の子どもにもどのような能力が備わっていないからですか。本文の内容に沿って、二十字以内で答えなさい。

問 四 Xにあてはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親に不平不満を言う

イ 親と口を利かなくなる

ウ 親を試そうとする

エ 親の機嫌をとる

問 五 傍線部3「棚にあげて」の意味として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 欠点を隠そうとして取りつくりくろくすること。

イ 失敗に気づかず見過ごしてしまうこと。

ウ 不都合なことには触れずにおくこと。

エ 面倒なことを後回しにしておくこと。

問 六 傍線部4「その必要」とありますが、具体的にはどのような行動をとることが必要だと筆者は感じたのですか。ここより後の文中から四十字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問 七 傍線部5「親、教師、さらには広く社会に対する甘えから脱却しようとする自覚を持つ」とありますが、筆者は子どもがそうした「自覚」を持って大人と接するようになると、大人と子どもとの関係はどのようになるか、筆者は「〜という関係」に続く形で、文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問八 Y にあてはまる言葉として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おろおろ イ しんみり ウ むしゃくしゃ エ うんざり

問九 本文の内容と合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の若者たちに比べて、欧米の若者たちの方が、積極的に質問や自分の意見を述べようとするのは、彼らが社会のルールよりも個人の権利を重んじた教育を受けているからだと考えられる。

イ 小学校低学年ぐらいの子どもは、親に対して自分の要求を言葉で伝えようとする反面、言いにくいことや都合の悪いことについては幼児期のように泣いて察してもらおうとする場合もある。

ウ 大人の存在をうっとうしく感じた子どもが大人から距離を置こうとした時、大人が子どもの心を理解しようとしないと、子どもはそうした大人の行動に失望し、関係がこじれてしまうことがある。

エ どんなにあいさつや礼儀が整っていても、相手に対する敬意を持たなければ、信頼関係を築くことはできないので、どのような相手にも、まずは敬意を持って接するよう心がけるべきである。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

千波は、施設から引き取った孤児である六歳の大地と、両親と四人で暮らす中学三年生である。言うことを聞かず、生意気な口ばかり大きく大地を、日ごろから千波は扱いかねていた。ある日、家出するという親友を泊めるために、千波が使われていない自宅の離れにロウソクを置いておいたところ、そこから出火して火事になり、母のぶ子がやけどを負って入院してしまった。次の文章は、千波と大地が病院から家に帰ってくる場面である。

今日は大地にとっても、大変な一日だった。きつと、すごくこわかったにちがいない。

背負うと、大地は意外なほどの軽さだった。ささえる手のひらに、尾てい骨が当たる。十五、六キロ？ 千波の三分の一下だ。背中にじんわり大地の体温が染みてきた。こんなに軽いからで毎日憎まれ口をたたいたり、わけのわからない行動のぶ子や千波をなやませたりしていたのか。そう考えるとしみじみ大地がいとおしくなった。ずり落ちそうになったおしりをゆすりあげると、

「ねむたーい」

あまえ声の大地が、千波の肩に頭をあずけてきた。首筋にかかる息がくすぐったい。大地がこんなに無防備に千波にからだをゆだねてくるのは、はじめてだ。胸がキュンとなった。その一方で、ぬぐいきれない黒い疑いが千波の背中をかたくする。火事の原因をつくったのは自分だ。だけど、火をつけたのは大地じゃないのか？

家が近づくにつれ、こげくさいにおいが鼻をついた。どうなってるだろう、家。見るのがこわい。胃が収縮してはきそうになった。背中の中のからだも、かたくこわばっている。

月明かりに照らされた冠木門のまえに立った。昼間と同じく、門はあけ放たれていた。塀も地面も放水でびしょびしょだ

った。冷静に冷静にと自分にいい聞かせながら、被害を確認する。焼けこげた庭木の奥、離れの屋根がまるく焼け落ちていた。* だけど作治のいったとおり、母屋はほとんど無傷^{むきず}だった。よし、これならだいじょうぶ。大地をおろし、ふたりして冠木門をくぐった。そのときだった。

ヒヤイン、ヒンヒン

庭の奥から、まるでほふく前進みたいな格好で、クーちゃんはいだしてきた。

「クーちゃんじゃ！」

「クーちゃん、クーちゃん。無事じゃったんじゃねえ」

半分になった鎖^{くさり}を引きずったまま、クーちゃんはどうやってよろこびをあらわせばいいのかわからないといった様子で、はしやぎまわった。背中に乗ってみたり、おなかを上にごろんとひっくり返ったり。

「クーちゃん、クーちゃん」

大地は自分もいっしょにころがって、ぬれた地面でズボンをぬらした。クーちゃんは鼻にしわを寄せ、齒をむきだして笑っていた。

「あつ、背中がこげとる！」

見ると、クーちゃんのおしりから背中にかけての毛が、こげてちりちりになっていた。しっぽもみじかく縮れている。

「消防のひとが放してくれなかったら、焼け死んどったかもしれん！」

クーちゃんのふるえるからだをだき寄せたとたん、千波の心^{*}のたががはずれた。仁王^{におう}立ちになって大地をどなりつけた。

「あんたじゃろ？ あんたが火をつけたんじゃ！」

大地は目に見えてふるえだし、視線をうろうろと庭の暗がりにはわせた。さつきから自分を責めつづけていた反動のように、残酷^{ざんこく}な気持ち^{きもち}がわきあがり、言葉がとまらなくなった。

²「お母さんじゃって、もしかしたら死んどったかもしれんのよ！ そうなったら、あんたのせいじゃ！」
「ほ、ほ、あんな」

はじめられたように大地は立ちあがった。くちびるが、ぶるぶるふるえている。千波は、ごくごくとつばを飲みこんだ。

「ロ、ロウソクで遊んどったんじゃ。ほしたら、ロウソクがたおれて、ほんでな、ほんでな、やぶれたカーテンがひらーとなつて、ほんでな、ほんでな、……えつ、えつ、えつ」

息がつまったのか、大地はのどを突きだし、苦しそうにあえいだ。

——やっばり。

クーちゃんがどうしていいかわからないといった様子で、大地のまわりをくるくるまわった。

「ほくは、もどされる。ほくは、もどされるんじゃー」

とうとう大地は空にむかって、ほえるように泣きだした。しまった！ 千波はくちびるをきつくかみしめた。大地をここまで追いつめちゃいけなかったのに。こんなこと、いわせちゃいけなかったのに。どうしていいかわからず、千波は夢中でパニックになって泣き叫ぶ^{きけい}大地をだきしめた。

「大地、ゴメン。落ち着き！ だいじょうぶ。だれもあんたをもどしたりせんよ！」

なおも千波の腕^{うで}の中でばたばた暴れながら、大地はくり返した。

「もどされるー。悪い子は、もどされるんじゃー」

大地のおそれが、からだ中から伝わってきた。千波のからだを電流が走る。³ごめん、大地、ごめん。大地をだく腕にまします力をこめながら、千波は心の中であやまりつづけた。うちは、ひどいお姉ちゃんじゃ。全部あんたのせいしようとした。それに、うち、あんたをもどせばいいと思つたこと、なんべんもあつた。

「帰つとったんじゃね。お母さん、どんな？」

にぎやかな声とともに、三宅酒店のお嫁さんが駆けこんできました。

「……だいじょうぶでした」

千波の声はかすれていた。

「よかったあ。おばあちゃんからいわれとるんよ。作治さんは病院じゃろうけえ、今晚はうちに泊まりんさい。ご飯もできとるし、風呂もわいとるよ。あー、クーちゃんも無事じゃったんじゃねー。よかった、よかった。クーちゃんには、えさやっつて、つないどくわね」

——助かった。

地獄に仏つて、きつとこういふことをいうんだ。ふだんは、ほんほんとはつきりものをいう口調が苦手で、あまりしゃべったこともないお嫁さんだけど、いまの千波にとつては救いの神だった。ようやくパニックのおさまりかけた大地をひざに乗せて答えた。

「ありがとうございます」

「料理じょうずのぶ子さんくらべたら、口にあわんかもしれんけど、とにかくこんなときは食べて寝るんが一番じゃけえね」

テーブルに湯気の立った親子どんぶりがはこばれてきた。味噌汁もそえられている。おばあちゃんは火事のショックで早寝してしまつたのか、姿が見えなかつた。

「ひつ、ひつ、いただきます」

まだしゃくりあげてはいたけれど、大地がはしを取つたので、千波はようやくほつとした。

千波自身はまったく食欲がなかつた。のどのつかえが取れない。

——うちはひどい。火事の原因をつくつたのは自分なのに、これ幸いと大地のせいにしよつとした。サイテーの人間だ。

苦い自己嫌悪が、三宅酒店の黒光りする床板をとおして、はいのぼつてきた。その黒い手になでられて、さむくもないのだからがふるえた。

「あれ、やつぱりおいしゅうない？」

ほとんど手つかずの千波のどんぶりを見て、お嫁さんはがっかりしたような声をあげた。

「そんなことないです。……ごめんなさい」

あわてて千波はあやまつた。

「ええんよ、ええんよ。あんなことがあつたんじゃけえ、食べられんであたりまえ。はよ、お風呂はいつて寝んさい。こんなときは寝るのが一番」

せつつかれるように順に風呂にはいり、ならんで敷かれたふとんに横になった。からだがあたたまると、すぐに大地は寝息を立てはじめた。よつぽどつかれていたので、おしりを突き立てたおかしな格好で眠っている。片方のほつぺたがひしゃげて、まるつきり小さなモンスターのように見えた。

からだはつかれきつているのに、目がさえて眠れない。月の光のさしこむうす暗がりの中で、千波はいつまでも見なれない部屋の見なれない天井を、まばたきもせず見つめていた。ミイラのように包帯を巻かれたぶ子の姿と、
(ぼくは、もどされる。ぼくは、もどされる)

大地の哀切な叫びとが、心をしめつける。苦しかった。いまこそ、のぶ子にそばにいてほしかった。

——お母さん、お母さん、お母さん。

何度も口をあげ、声にならない声で呼びつづけた。

——お母さん、死んじやいやだ。

そのとき大地の寝言が聞こえた。

「お母さん」

千波はからだをすべらせ、そつと大地のふとんにもぐりこんだ。顔を寄せると、うすくあいた口から、ほのかにあまい息がかかる。アトピーであれてがさがさの手の甲をなでていると、大地がいとおしくてたまらなくなった。と同時に、大きな悲しみにおそわれた。いとしいと悲しいは、ひとつの言葉なのかもしれない。大地をいとおしく思えば思うほど、悲しみの感情がわきあがる。千波のほおを涙がすべり落ちた。大地は広い草原に立つ一本の苗木のようだ。細くてたよりない。だけど風にゆらぎながらも、必死にわが家という土壌の上で根をはろうとがんばっている。

時を重ねるごとに、ひとつずつあなたを知っていった

さらに時を重ねて、ひとつずつわからなくなつて

『サウダージ』の一節が胸の中でリフレインした。それでいいのだ、きつと。そうやって大地との時間をかさねていけばいい。わからないからこそ、わかった瞬間のよろこびは大きいのだ。今日千波は、大地の心の声を聞いたと思った。それは胸をえぐられると同時に、大きなよろこびももたらしてくれた。

大地を憎む気にはどうしてもなれなかった。

二〇〇九年 八東 澄子 『明日につづくリズム』ポプラ社

〔注〕 *作治：千波の父親。

*クーちゃん：千波の家で飼っている犬の名前。

*たががはずれた：コントロールできなくなること。

*三宅酒店のお嫁さん：千波の家と家族ぐるみで付き合いのある、近所の人。

*サウダージ：千波の好きな歌の題名。

*リフレイン：繰り返されること。

問 一 傍線部1「そう考えるときしみ大地がいとおしくなった」とありますが、このときの千波の気持ちを説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大地はまだ小さな子どもであり、日ごろの困ったふるまいも未熟なせいだと思えば、いちいち目くじらを立てるほどのことではないと感じている。

イ いつも憎まれ口ばかりたたいている大地だが、火事でこわい思いをしたせいか、いつになく背中越しにあまえてくるのが愛らしく、守ってやりたいと思っている。

ウ まだ小さく、分別もつかない年頃である大地ならば、ロウソクで遊ぶことが危険だということがわからなくても仕方がないと考えている。

エ 大地の行動に振り回されることもあり、困ったものだと思っていたが、背負った大地のからだか、思いがけず小さく幼いことに気づき、いじらしく思っている。

問二 傍線部2「お母さんじゃって、もしかしたら死んどったかもしれんよ！ そうなったら、あんたのせいじゃ！」とありますが、このときの千波の気持ちを説明したものととして最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 家の様子を見るまでは、大地を問いつめようとはしなかったが、離れが焼け、クーちゃんも危険だったことがわかったため、火事が起きたのを大地のせいにして自分の罪を何とか軽くしようと考えている。
- イ 焼け落ちた離れや毛のこげたクーちゃんを見て、火事の責任を感じていただけによけい気持ちが高ぶってしまい、自分の気持ちが抑えられず、火をつけた疑いのある大地に対して、激しい怒りをぶつけている。
- ウ あまえてくる大地へのいとおしさから、火事の責任は大地よりも自分にあるのだと自分に言い聞かせていたが、家の様子を見ているうちに疑いの気持ちが抑えられなくなり、大地に火をつけたことを認めさせたいと思っている。
- エ 危ないところで助かったクーちゃんを見たたん、やけどを負って入院し、包帯を巻かれた母の姿を思い出してしまい、自分が火事の原因をつくったことを忘れるほど、火をつけた大地に対して恨めしく思っている。

問三 傍線部3「千波のからだを電流が走る」とありますが、このときの千波の気持ちを説明したものととして最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日ごろからよく思っていなかった大地を火事のこと責めるなかで、これまでたまっていた不満を晴らそうとしてしまったことに申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。
- イ 火で遊んだことを大地はすでに後悔しているのに、さらに追いつめてまで問いただすことではなかったと、年長者らからぬ感情的な物言いをしてしまった自分を恥じている。
- ウ 大地が突然パニックを起こして泣き叫びはじめたことにとまどい、自分の言葉が予想していた以上に大地の心に

影響を与えてしまったことにおどろいている。

エ 自分にも原因があるのに、大地だけに都合よく火事の責任を押しつけ、大地の心の奥にあった苦しみを引き出してしまった自分の浅はかさを後悔している。

問四 傍線部4「いまの千波にとっては救いの神だった」とありますが、どうしてですか。その理由として最も適當なものをおのの次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 泣き出した大地と二人きりで千波まで気持ちが落ち込んでしまっていたが、いつもはわずらわしく感じていた「お嫁さん」のにぎやかさによって気持ちを明るく前向きにさせてもらったから。
- イ 大地がいつまでも泣き止まないうえに、両親のいない家で今晩どう過ごそうか困っていたところに、「お嫁さん」が食事と寝泊まりするところを提供すると言ってくれたから。
- ウ 泣き叫ぶ大地をかかえ、千波も自分を責めることしかできないところへ、事情を知らない「お嫁さん」が声をかけてくれて、その場の雰囲気を変えてくれたから。
- エ 千波のせいで混乱してしまっただけは、もはや千波の言葉を受け入れなくなってしまうが、次々に話しかけてくれる「お嫁さん」ならば大地の気をまぎらわせてくれそうだったから。

問 五 傍線部5「大地は広い草原に立つ一本の苗木のようだ」とありますが、これは大地のどのような様子を説明していますか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大地をこれから成長していく苗木にたとえることで、今は懸命に家族の中に溶けこもうとしている大地だが、やがて大きくなれば家族の中で中心をなす存在となっていくことを暗に表している。

イ 大地を、広い草原の中にただ一本だけ立っている苗木にたとえることで、温かい家族の中にいながらも、大地が自分だけ血がながっていないことで、誰にも相談できない孤独を感じていることを表している。

ウ 孤児である大地を、周りに木がない草原の中の苗木にたとえることで、家族として受け入れてもらえるかという不安を抱えながら、必死に家族の一員になろうとしている大地のけなげな様子を表している。

エ 大地を風にゆらぐ細い苗木にたとえることで、孤児であるため親の愛情を受けてこなかった大地が新しい家族を心の支えにし、くじけることなく世間の冷たいまなざしに耐えている様子を表している。

問 六 傍線部6「今日千波は、大地の心の声を聞いたと思った。それは胸をえぐられると同時に、大きなよるこびももたらしてくれた」について、次の問いに答えなさい。

① 「大地の心の声」とは、大地のどのような気持ちのことですか。具体的に答えなさい。

② 「それは胸をえぐられると同時に、大きなよるこびももたらしてくれた」とありますが、どういうことですか。これを説明したものと最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日ごろの生意気な態度に隠された大地の本心を知って心を痛めながらも、今回のことで今までもよりも大地を理解し、より良い関係を築いていくきっかけになるだろうという希望を見出すことができたということ。

イ 大地の本当の気持ちに触れて衝撃を受けた一方で、今までの大地の不可解な行動もこれで説明がつき、やっと

ほんとうの家族として付き合っていく自信ができてきたということ。

ウ 自分が考えなしに放った言葉が大地を深く傷つけたことを悔やみつつも、本心を見せてくれた大地が、自分に多少なりとも心を開いてくれているということがわかったということ。

エ 大地はまだ幼く、未熟さを大目に見てやれなかったふがいなさをかみしめる反面、理解できない存在だった大地を身近に感じることで、初めて家族としての愛情を持つようになったということ。

問 七 本文の特徴を説明したものと最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千波の語りの中で「ほふく前進みたいな格好」「ミイラのように包帯を巻かれた」などの比喩表現を用いることによって、感受性豊かな千波の内面を表そうとしている。

イ 千波の心情に焦点を当てていねいに描くことによって、周囲の人とのやり取りや、自分自身と向き合うことによって生まれた心情の変化を、読者が読み取りやすいようにしている。

ウ 地の文と区別して、千波たちの会話文では方言を用いることによって、都会では感じることのできない地方独特の人の温かみを感じさせる文章になっている。

エ 千波たちの不注意で火事を起こしてしまうという重いテーマを扱いながらも、歌詞を引用することにより、読者の心を軽くし、読み進めやすくしている。

五

- 次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。
- 1 道路をカクチヨウするために工事を行う。
 - 2 ゲンゼイをうったえる。
 - 3 しっかりと準備をして試験にノゾむ。
 - 4 入会手続きの書類をユウソウする。
 - 5 天地ソウゾウの神話を読む。

六

- 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。
- 1 台風が来るので雨戸を閉める。
 - 2 選手の皆みなさんは直ちちに集合してください。
 - 3 記憶きおくの断片たんぺんをつなぎあわせる。
 - 4 あの二人は仲のよい夫婦だ。
 - 5 夕方になり街灯まちあかりがつきはじめる。

問題はこのページでお願いします。

